法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-09

サクソンとザクセン : 中世初期アングロ・サクソン諸王国の民族的背景(3)

IWAYA, Michio / 岩谷, 道夫

(出版者 / Publisher)
法政大学キャリアデザイン学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学キャリアデザイン学部紀要 / 法政大学キャリアデザイン学部紀要
(巻 / Volume)
3
(開始ページ / Start Page)
219
(終了ページ / End Page)
236
(発行年 / Year)
2006-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00003227

Hosei University Repository

サクソンとザクセン
—中世初期アングロ・サクソン諸王国の民族的背景（3）—

法政大学キャリアデザイン学部教授　岩　谷　道　夫

1.

西暦5世紀半ば以降ブリテン島に渡り、アングロ・サクソン七王国を建国したゲルマン人のアングル、サクソン、ジュート、フリージアンのうち、サクソンは、イングランドの南部に、ウェスト・サクソン（ウェセックス）、サウス・サクソン（サセックス）、イースト・サクソン（エセックス）の三王国を建国した。その中で、後の二国は、デーン人の侵入等により滅亡したが、最後に残ったウェスト・サクソン王国が、デーン人をデーン・ロー地域にとどめ、全イングランドを統一した。その統一王国を創ったウェスト・サクソン王国のアルフレッド大王は、『アングロ・サクソン年代記』をはじめ、様々な文化事業を行ったが、その一つに、ラテン語の古典（ベーダ、オロシウス、ボエティウス、グレゴリウスⅠ世）の古期英語ウェスト・サクソン方言への翻訳がある。アルフレッド大王により、その価値を正しく認識されていたウェスト・サクソン語は、他のアングロ・サクソン諸国の言語の文献が、デーン人の侵入により灰燼に帰したということもあり、その後のイングランドの中心的な言語となった。そしてその状況は、1042年のデーン人カヌートの王国、そして1066年のノルマンディー公国ウィリアム（ギョーム）による征服によりイングランドが支配されるまで、200年ほど続くことになる。それでは、その初期イングランドにおいて支配的となったウェスト・サクソン王国を担ったサクソンとは、どのようなゲルマン人部族であったのか。本稿では、サクソンについて、大陸の故地にとどまりドイツの有力な領邦国家を担ったザクセンとの関係を中心に、ブ

Hosei University Repository

リテン島のアングルとの関係も併せて考えながら、その部族の成立過程と実体を追究することにしたい。

2.

古期英語ウェスト・サクソン方言で書かれた『アングロ・サクソン年代記』には、西暦449年に、ジュートが、HengistとHorsaという二人の首長に率いられてブリテン島に上陸し、ケント王国を創ったという内容の記述が見出される(1)。そしてその記述は、『アングロ・サクソン年代記』より200年位前にラテン語で記述されたベーダの『英国民教会史』に依拠している(2)。ベーダは8世紀前後のノーサンブリアの人であり、従って、アングル、サクソン、ジュート等のブリテン島への初期の移住についてのベーダの記述も、他の文献に拠っている。ベーダが『英国民教会史』の執筆の際に依拠した文献は、ベーダ自身によっても言及されているが(3)、アングル、サクソン、ジュート等のゲルマン人のブリテン島への移住についての記述が、どの文献に基づいているかは不明である。西暦449年に、ジュートがブリテン島に移住したことは事実であると思われるが、しかしそれはゲルマン人のブリテン島への襲来の、最初の年号ではない。それ以前、まだブリテン島がローマ帝国の属州ブリタンニアであった時期に、ブリテン島の東海岸には、数次のサクソンによる襲来があり、そのためその地域はサクソン海岸という名前で伝えられていた(4)。もっとも、ローマ支配下のブリテン島に対する脅威は、サクソンだけでなくフランクによっても生じていたという記録があり(5)、他のゲルマン人諸部族も、ブリテン島への襲来の主体であったと推測される。しかしながら、西暦449年のジュートのブリテン島への上陸は、単なる一時的な襲来ではなく、その後のアングロ・サクソン七王国の建国に連なる、永続的な移住を目的とした全面的な移動であったことが、『アングロ・サクソン年代記』の記述によって確証され得る。それ故西暦449年は、ゲルマン人諸部族のブリテン島との関係の歴史において、時代を画する年号ということができるであろう。

ローマ帝国統治時代にブリテン島の東海岸に襲来していたサクソンが、大陸の故地から出発していたことは論を待たないが、それではそのサクソンの故地

Hosei University Repository

は、どのような領域であったのか、文献的に遡って確認することにしたい。

大陸のサクソンについての、最初の文献的言及は、プトレマイオスによるものである[6]。プトレマイオスは、西暦2世紀のローマ帝国領内アレキサンドリアのギリシア人で、ローマの歴史家のタキトゥスとほぼ同時代人である。プトレマイオスは、世界地図の製作者としてよく知られているが、ゲルマン人についても詳しい記述を残している。タキトゥスの『ゲルマーニア』には、古代西洋におけるゲルマン人についての最も詳細な記述が見出される。しかしながら、そこにはサクソンの名は記されていない。またタキトゥスより150年ほど前に、部分的ではあるが、ゲルマン人についての重要な言及を残している、カエサルの『ガリア戦記』にも、サクソンの名は触れられていない。その意味で、プトレマイオスのサクソンについての記述は、大変重要である[7]。その場合、次の問いが提出され得る。即ち、タキトゥスの『ゲルマーニア』に、サクソンの名が見出されないのに対して、タキトゥスの少し後代であるとはいえ、ほぼ同時代のプトレマイオスに、なぜサクソンの名が見出されるのであろうか。それは、一方の記述が正しいのであれば、もう一方の記述は不正確あるいは不十分な記述ということになることを意味しているのであろうか。あるいは、双方の記述は、それぞれ事実を正しく伝えていて、それ故そこに、事実に関する何らかの変化が生じたとみなされ得るのであろうか。その点について具体的に考えてみたい。

まず、タキトゥスの中で、北海沿岸からその南東部、そしてユトランド半島からその南部にかけて居住している主なゲルマン人諸部族は、次のような部族である[8]。

フリースィイー（フリージアン）、ドゥルグブニイー、カウキー、ケルスキー、カッティー、スエービー、キンブリー、レウディーグニー、アウィオーネース、アングリイー（アングル）、ワリーニー、エウドセース（ジュート）、スアリーネース、ヌイトーネース、ルギイー、ランゴバルディー、セムノーネース、ヘルムンドゥーリー、等。

また、プトレマイオスの記述の中の、同じ地域に居住していた主なゲルマン

Hosei University Repository

人諸部族を表記すれば次のとおりである[9]。

フリースィイー（フリージアン）、ドゥルグブニイー、カウキー、ケルスキー、カッティー、スエービー、キンブリー、テウトニー、アングリイー（アングル）、サクソネース（サクソン）、ワリーニー、エウドセース（ジュート）、ルギイー、ランゴバルディー、セムノーネース、ブルグンディオネース、等。

一見して、タキトゥスとプトレマイオスで、多くの部族名が共通して見出されることに気付かされる。実際には双方の、北ドイツの地理的位置における記述は、必ずしも一致しているわけではないが。上の諸部族の名称に関する相違点は次の部分である。即ち、レウディーグニー、アウィオーネース、スアリーネース、ヌイトーネース、ヘルムンドゥーリーは、タキトゥスには見出されるが、プトレマイオスには見出されない。逆に、テウトニー、サクソネース（サクソン）、ブルグンディオネース（ブルグンド）は、プトレマイオスには言及されているが、タキトゥスには言及されていない。

とりわけ本稿と関係する重要な相違点は、1）タキトゥスとプトレマイオスのアングル（アングリイー）、そして、2）プトレマイオスのサクソン（サクソネース）である。1）のアングルは、双方に言及されているが、その地理的位置は異なっている。その点も相違点であると言えよう。その二つの相違点について考えてみたい。

その前に、本稿と部分的な関係を持つと思われる他のいくつかの部族について、少し触れることにする。タキトゥスに、ジュートと思われる部族名エウドセースが見出され[10]、それは、プトレマイオスにおいても、キンブリーの南に居住するユトランド半島の部族として記述されている。またワリーニーも、タキトゥス、プトレマイオスの両方に見出される。ただ、テウトニーについては、タキトゥスには全く見出されず、一方プトレマイオスには見出される。テウトニーは、キンブリーとともに、カエサルにも言及されている部族である[11]。そのテウトニーについて、タキトゥスには全く言及がないのは不思議である。また、本稿とは直接関連はないが、ブルグンドについてもテウトニーについて

Hosei University Repository

と同じように、プトレマイオスに、より事実に近い記述が見出されるようである。

アングル（アングリイー）に戻れば、アングルは、タキトゥスとプトレマイオスの両方に言及されてはいるものの、プトレマイオスの中のアングルは、ユトランドの故地ではなく、より南方のランゴバルトに隣接した地域の居住部族となっている。プトレマイオスの時代には、アングルは、たとえその一部が南下していたとしても、まだユトランドの故地には、後にブリテン島に移住することになる本体の部族が居住していたはずである。

また、サクソン（サクソネース）についてであるが、タキトゥスの『ゲルマーニア』にはサクソンが記述されていない。しかしそれが即ち誤りであったと言うことはできない。タキトゥスの『ゲルマーニア』では、ユトランド半島とその隣接地域についての記述は、詳細な内容を含んだものであるからである。一方、プトレマイオスは、同じ地域について、タキトゥスほど詳しい記述は見出されないが、前述のように、タキトゥスと共通する多くのゲルマン人部族名が見出され、それ故、誤りと思われる部族名は存在しないものと考えられる(綴りの上での誤りと思われる部分はあるが)。それでは、プトレマイオスに、サクソンの名が見出されるということは、何を意味しているのであろうか。推測され得るのは、タキトゥスの時代とプトレマイオスの時代の間に、サクソンが成立したということであろう。もっとも、タキトゥスについても、プトレマイオスについても、その記述されている事柄のすべてが事実であるか否かについては確証するすべがない。サクソンの成立についての検討も、その資料的限界を前提に行わざるを得ないのであるけれども。

それでは、サクソンという部族は、どのように成立したのであろうか。その成立については様々な説があり、その様々な説の分類においても、論者により、異なった分類がなされてきた。ここでは、様々な説を、その分類方法も含めて考えてみたい。

まず、シュヴァルツは、サクソンの成立について、タキトゥスに言及されているカウキーとの関連で、次のような説に分類している。即ち、1）カウキーはサクソンに征服された、2）カウキーは自由意志によりサクソンと統一した、3）カウキーはサクソンによって故地を追いやられた、4）カウキーはサクソ

Hosei University Repository

ン自体である、以上である[12]。シュヴァルツは、そのそれぞれの説についての説明の中で、自分がどの説をとるかについて、明言していない。しかしながらシュヴァルツは、タキトゥスとプトレマイオスについて比較している文脈の中で、タキトゥスのレウディーグニーに言及し、それをサクソンと記している[13]。一方でシュヴァルツは、カウキーの、ブリテン島との関係にも触れ、サクソンのブリテン島への移住におけるカウキーの役割を示唆している[14]。

ホジキンは、タキトゥスとプトレマイオスの記述から、まずタキトゥスにサクソンが見出されない事実に対する疑問を投げかけ、プトレマイオスのサクソンについて、その地理的位置関係から、タキトゥスのレウディーグニーであると考えることの妥当性を問う[15]。そして考古学に基づくプレッケの説を紹介する。それは、大陸のカウキーがブリテン島に移住し、そのカウキーの跡地をサクソンが引き継いだというものである。ホジキンは、タキトゥスのカウキーがそのまま大陸のサクソンになった、あるいはプレッケの言うように、タキトゥスのカウキーのほとんどがブリテン島に移住した跡地に東に居住していたサクソンが西に移住した、という二つの可能性を提示し、そのいずれが事実であったかについて最終的な結論を述べるのは困難としている[16]。サクソンを成立させた部族としては、前者の説ではカウキー、後者ではカウキー以外の別の部族ということになるであろうが、ホジキンはその部族について、触れていない。また、ホジキンは、チャドウィックに言及し、ブリテン島のアングルとサクソンが分類困難なほど類似した状態であるようにも思われることから、既に大陸時代に、アングルとサクソンは連合状態にあったという説を紹介している[17]。しかしながらその説に部分的に共鳴しながらもホジキンは結論を示すことを控えている。

ホジキンに引用されているチャドウィックの説について少し考えてみたい。チャドウィックは、タキトゥスのアングル、そしてプトレマイオスのアングルとサクソンを比較検討し、その多くに共通の部族名が見出されることを指摘しながら、アングルとサクソンについての言及における相違点に触れ、次のような仮説を提示している。即ち、アングルについて、タキトゥスのユトランド半島の居住部族としてではなく、プトレマイオスの中で、サクソンの隣接地域の居住部族として記述されているのは、プトレマイオスの記述の誤りではなく、

Hosei University Repository

既にその時点でのアングルの南下を示しているのであり、その後のその地域のアングロ・サクソン連合部族の存在を示唆している；また、その連合がなされる頃、北部のユトランド半島では既にフリージアンとデーンの割拠が始まっており、また4世紀にユトランド近くで確実に存在していたアングルのオッファ王の国家についても、その国家の版図がユトランド半島の南方を含めた広い地域であった可能性が存在する、と(18)。もっともその説については、チャドウィック自身も指摘しているように、後にサクソンが広大なカウキーの地域に進出するようになった場合に、（国王オッファの支配していたような）アングルが、後の大陸のサクソンという名称の中に、自らの名称を解消させることがあり得るかについて、疑問の余地が残るであろう。またチャドウィックは、サクソンを構成する主体となったゲルマン人部族については、特に触れていない。

一方、コリングウッドとマイヤーズは、やはりタキトゥスとプトレマイオスの記述を比較検討し、プトレマイオスのサクソンの、タキトゥスとプトレマイオスのカウキーとの関係を問題にしている。そしてその問題について、次のようにいくつかの考え方を要約している(19)。即ち、まず最初に、サクソンが、以前のカウキーと同じ地域に居住し、その二つの部族が同じような特徴、習慣を持つように思われることから、その二つを本質的に同一とみなす考え方、そして、もう一つは、プトレマイオスにおけるカウキーとサクソンの区別、またその後のカウキーのライン川中流域における混乱状態を指摘して、カウキーのもとの居住地域からの南西への移動があり、その結果生じた旧カウキー居住地域へのサクソンの移住があったという考え方、またもう一つは、考古学の資料から、カウキーは、比較的早い時期にタキトゥスの頃の隆盛を失っていたという状況があり、そこにサクソンの西方への移動により、カウキーが解体状態になり、その一部がライン川中流域に移動し、他の残った部分がもとの故地でサクソンに併合されたとする考え方、である。コリングウッドとマイヤーズは、そのいずれかが事実であるとは確言せず、Chaukenfrageの困難さを強調している。コリングウッドとマイヤーズは、しかしながら、ランゴバルトの南下に伴って、サクソンが西暦200年頃東ホルシュタインまで広がり、次の50年でエルベ川とエムス川の間のカウキーに取って代わったか、あるいはカウキーを併合したとも述べているので、恐らくはサクソンが、もともとカウキーではな

Hosei University Repository

かったという立場に立っているものと思われる。

最後に、ロイベは、サクソンという部族の成立の問題の困難さを強調している。ロイベは、サクソンの成立について、これまでの論者の説を、征服説と同盟説の二説に分類している[20]。つまり、ロイベは、プトレマイオスのサクソンの記述を事実とみなし、それがどのようにして後の広大な地域に居住するサクソンになったかについて、二つの説を提示しているわけである。ロイベは、2世紀半ばのプトレマイオスと、プトレマイオスの次にサクソンの言及されている285年ないし286年のエウトロピウスの記述の間に、サクソンが出現したとしている[21]。しかしながらロイベは、レウディーグニーとカウキーを含め、実際に具体的にどのような部族が後の広大な地域に居住するサクソンになったかについては、確言が困難としている。

以上、サクソンの成立について、代表的な論者の言及を瞥見してきた。ここでサクソンの成立について、問題点を再考してみることにする。

結局、問題となるのは、サクソン成立におけるカウキーの役割である。そしてその場合に、プトレマイオスのサクソンとカウキーの記述について、どのように考えるかである。プトレマイオスのサクソンとカウキーの記述を事実であると考えれば、サクソンとカウキーは別の部族であるということになり、カウキー以外の部族の、どの部族がサクソンになったか、という問いが生じるであろう。そして、それが、プトレマイオスのサクソンと地理的位置の類似性から、タキトゥスのレウディーグニーであったとする見解が、シュヴァルツに見られる説である。もっともシュヴァルツは、サクソンのブリテン島への移住におけるカウキーの役割を強調している。それは、カウキーと連合したにせよ、カウキーを併合したにせよ、サクソンはレウディーグニーを中心に成立したが、ブリテン島へ移住したサクソンは、旧カウキーであるとする考え方である。また、チャドウィックも、シュヴァルツと同じように、サクソンをカウキー以外の別の部族としているが、その部族の実体について言及していない。コリングウッドとマイヤーズ、そしてロイベもそれと同じ見解と思われる。ホジキンは、サクソンがカウキーであるか、カウキー以外の部族であるかについては、確言していない。

一方、タキトゥスとプトレマイオスのいずれにも言及されているカウキーを、

Hosei University Repository

サクソンと考える立場が存在している。それは、タキトゥスとプトレマイオスにおけるカウキーが、その実体に共通する点が見出されるとする観点からである。その場合、サクソンとカウキーの併記されているプトレマイオスの記述について、それが誤りであるとする立場と、事実であるとする立場の二つに分かれるが、後者の場合は、カウキーが自らサクソンに働きかけ、サクソンと連合した後に、カウキーという名称をサクソンの中に解消させたという可能性しか考えられず、それは現実的には困難と考えられる。様々な説を提示しているチャドウィック、ホジキン、そしてコリングウッドとマイヤーズは、諸説の一つとして、サクソンのカウキー説を示しているが、その場合、明言されてはいないとしても、その説がプトレマイオスの記述を誤りとしていることを前提として述べているのである。ちなみにシュヴァルツは、ミュレンホフはじめ、プトレマイオスを誤りとする見解に触れている。

結局、サクソンの成立はどのようなものであったのか。またサクソンの実体はどのようなものであったのであろうか。まず、プトレマイオスのサクソンについての記述であるが、筆者はその記述が誤りであるとは考えない立場を支持したい。プトレマイオスのゲルマン人についての記述は、前述のように、ほぼタキトゥスの記述と重なり、部族名に綴りの誤りが見出されるにせよ、そこに唐突に一つの実体のない部族が言及されているとは思われないからである。サクソンが実際に存在する部族であれば、一方カウキーも実際の部族と考えられるので、その関係が問題になることになる。確かにカウキーは、タキトゥスに見出される記述からすれば、後の北ドイツのニーダーザクセンのサクソンを髣髴する極めて有力なゲルマン人である。またプトレマイオスにおいても、そのカウキーの記述の内容は共通している。いかにも実体としては、カウキーがサクソンになったという説を裏付けているように捉えられ得るが、しかしながらプトレマイオスのサクソンは、そのカウキーの東に存在している。従ってサクソンは、少なくともその成立時においては、カウキーであることは考えられない。そうであれば、どの部族がサクソンになったのかということになるが、その部族名を明示する論者は少ないけれども、シュヴァルツの指摘するように、やはり地理的に最も近いレウディーグニーが、重要な役割を持っているのではないであろうか。タキトゥスとプトレマイオスの両方の記述、そしてその二人

Hosei University Repository

の時代の比較的接近した状況から、ユトランド半島南部の居住部族の中で、後のサクソンになり得る部族は、他に見出すことは困難なように思われるからである。その場合、レウディーグニーがサクソンになったとしても、タキトゥスとプトレマイオスの記述の中では、カウキーは北ドイツの広大な地域に居住する大部族である。後にサクソンは、そのカウキーの領域に進出し、一方カウキーという部族名は、ほぼ消滅してしまう。それでは、サクソンは、カウキーとどのような関係を経て、以前のカウキーのような大部族になったのであろうか。そこで、サクソン・カウキー連合説、サクソンによるカウキー併合説、の二つに分かれるのであるが、筆者は、決定的な論拠は見出せないが、後者の説を支持する立場である。タキトゥスのレウディーグニーが、プトレマイオスのサクソンとなり、そしてそのサクソンのカウキーとの関係において、ランゴバルトの間接的な関与の可能性が考えられるからである。

次に、サクソンの成立・拡大に、間接的な役割を演じたと思われる、そのランゴバルト、そしてそのランゴバルトとサクソンとの関係について、トゥールのグレゴリウスの『フランク史』の中の記述を中心に考えることにしたい。

3.

トゥールのグレゴリウスの『フランク史』(22) には、大陸のサクソン（ザクセン）についての記述が、しばしば見出される。トゥールのグレゴリウスは、6世紀のメロヴィング王朝のフランク王国の歴史家であり、そこで言及されている大陸のサクソンは、フランク王国に服属する以前のサクソンである。例えば、『フランク史』には、サクソンの西ローマ帝国との戦いについての言及があり（Ⅱ、19)、それはオドワケルによる支配、西ローマ帝国の崩壊の直前であるので、5世紀半ば、即ち、サクソンのブリテン島への移住の時期と重なる。476年の西ローマ帝国崩壊後のガリアを支配したフランク王国は、国王クロートヴィッヒによるカトリックへの改宗があり、その後6世紀の前半にかけて、フランクによる、他のゲルマン人部族王国の統合が行われたが、トゥールのグレゴリウスは、まさにその時代の歴史の証人であった。例えばその時代に、『ベーオウルフ』に登場するイェーアタスGeatasの国王ヒイェラークの、フラ

Hosei University Repository

ンク王国領内への侵入があった（『フランク史』、Ⅲ3）。サクソンのフランクとの戦いは、Ⅳ10、Ⅳ14に見出される。また、Ⅳ10に言及されているのは、サクソンのテューリンジアンとの親しい関係で、それは西暦555年頃のことである。サクソンとテューリンジアンの関係については、その関係の内容は異なっているが、10世紀のコルヴェイのウィドゥキントによる言及を想起させる[23]。ここで注目されるのは、イタリア半島へ移動したランゴバルトへの、友軍としてのサクソンの存在である（Ⅳ42）。そのサクソンとランゴバルトとの関係の記述は、サクソンという部族の成立について示唆する可能性もあり、その点で大変重要である。

まず、サクソンとランゴバルトは、いつ接点を持ったのであろうか。ランゴバルトは、スカンジナヴィアから、ゴートの移住以前に北ドイツに移動し[24]、タキトゥスには、ユトランド半島の南方の地域におけるランゴバルトについての言及が見出される[25]。また、プトレマイオスにおいても、サクソンの近隣地域に、ランゴバルトが言及されている[26]。その後、ランゴバルトは全面的にパンノニアに移動し、数世紀の間そこにとどまり、やがてゲルマン人の大移動の最終段階の移動の主体として、イタリア半島に向かうことになる。そのイタリア半島への移動に、サクソンが加わっているのである[27]。そうであればランゴバルトとサクソンの接点は、タキトゥスにおけるランゴバルトの北ドイツにおける居住の時代以降であり、また、タキトゥスの記述には、サクソンという部族名は存在せず、半世紀後のプトレマイオスに見出されることになるので、やはりプトレマイオスの時代が、その接点となるであろう。以上のことから推測され得るのは、恐らくランゴバルトの、サクソンの成立・拡大への関与である。つまり、恐らくはレウディーグニーにより、サクソンという名称が用いられるようになる前後に、ランゴバルトの軍事的協力があった可能性が存在するのである。レウディーグニーが主体となってサクソンが成立し、そして、プトレマイオスでは、そのサクソンとカウキーが並存していた。その場合、そこには、カウキーとレウディーグニーの間の対立構造があり、その力関係の最終的帰結に、ランゴバルトの重要な関与があったと推測されるのである。タキトゥスの記述によれば、カウキーとレウディーグニーの力関係は、圧倒的に前者が優勢である。レウディーグニーがサクソンとなる前後にランゴバルトの軍

Hosei University Repository

事的援助があって、両者の勢力の逆転があり、最終的にサクソン（レウディーグニー）主導で、統一サクソンが成立した。ランゴバルトは、タキトゥスでは少数ではあるが極めて強力な部族として言及されている。そのタキトゥスの記述と、後のトゥールのグレゴリウスにおけるランゴバルトとサクソンの密接な関係についての言及は、少なくとも以上の推論の可能性を生じさせる内容を含むもののように思われる。

以上、サクソンの成立におけるランゴバルトの関与の可能性について言及してきた。次に、ブリテン島のサクソンと大陸のザクセンの関係について、ブリテン島へのサクソン移住以降の交流の事実、特にローマ・カトリック教会のキリスト教の布教の観点から考えてみたい。

4.

西洋中世初期、ブリテン島におけるイングランドの諸王国は、ローマ・カトリック教会にとって、大変重要な意味を持っていた。それは、次のような事情によるものである。ゲルマン人諸部族は、いわゆるゲルマン民族の大移動により、ローマ帝国領内に侵入し、割拠して部族国家を建国したが、その後、離合集散やさまざまな抗争を経て、ブルグンド、テューリンゲン、アレマンネン、等の有力なゲルマン人国家は、フランク王国に併合され、またゲピートはランゴバルトに滅ばされ、ユトランド半島以南の大陸におけるゲルマン人諸国家は、6世紀後半には、フランク、ザクセン、フリージア、ランゴバルト、西ゴート等に淘汰されていた。そして、ブルグンド、テューリンゲン、アレマンネン、バイエルン等の部族国家を併合し、今日のフランスおよびドイツの大半を占めることになったフランク王国の、496年における国王クロートヴィッヒによるカトリックへの改宗は、西洋世界の安定に計り知れない影響を与えた[28]。しかしながら、フランク王国支配地域のカトリックの浸透状態は、ローマ法王グレゴリウスⅠ世を、満足させるものではなかった。グレゴリウスにとって、とりわけ危機的に感じられたのは、最も遅く移動してきた異教のゲルマン人部族ランゴバルトであった。ランゴバルトはイタリア半島に侵入し、モンテ・カシノのベネディクト派の修道院を攻撃の対象にした。そこで法王グレゴリウスは、

Hosei University Repository

いまだローマン・カトリックの浸透していないブリテン島への布教を決意することになったのである[29]。グレゴリウスは、ブリテン島のゲルマン人諸国をカトリック教会の新たな拠点とすることにより、大陸のゲルマン人地域の再布教活動を行うことを企図していたのであった。グレゴリウスⅠ世にとって、イングランドの諸王国における布教は、従って、遠大な計画のもとになされた極めて意義深いものであった。20世紀を代表する中世史家の一人、ベルギーのアンリ・ピレンヌは、その結果誕生したキリスト教ゲルマン人諸国、そしてその延長上の統一国家としての英国について、その固有な存在意義を力説している[30]。

本稿との関連から重要なのは、キリスト教化したイングランド諸王国から、大陸のゲルマン人地域に布教活動を行った、アングロ・サクソン修道士が現われたことである。フランク王国は、前述のように、メロヴィング朝時代にカトリックに改宗していたが、そのキリスト教は精神生活に浸透しておらず、またその後カロリング王朝に変わってからも、状況に変化はなかった。アングロ・サクソン修道士達、具体的には、ノーサンブリアのウィリブロード、ウェスト・サクソンのウィルフリード（ボニファティウス）といった人々が、フランク王国のフルダ、ザンクト・ガレン等におけるカトリックの司教座を確立し、そこから、バイエルン、アレマンネン等のフランク王国領内のゲルマン人地域へ、さらには、フリージアンそしてザクセンといった、フランク王国に服属していなかったゲルマン人地域へ布教活動を行った。その布教は、様々な困難を伴い、その修道士達の殉教という結果がもたらされる場合もあった。最終的にフランク国のシャルルマーニュによるザクセン戦争の後に、フランク王国におけるキリスト教の普及は完成される。そしてそのフランク王国の属領サクソニアから、今度は、ブリテン島の古期英語に翻訳されるほどの、キリスト教の信仰に満ちた古期サクソン語の文書が生まれることになる。古期英語の文献に*Genesis*という宗教詩があり[31]、その詩文中の一部が、古期サクソン語からの翻訳であるという事実が発見され、大陸のサクソンの文化の深さが実証されたのである。それは、19世紀後半の西洋における歴史比較言語学を主導したライプチヒ大学の青年文法学派の一人、ズィーファースによって発見された。古期英語の*Genesis*は、『旧約聖書』の「創世記」を部分的に詩の形でパラフレーズ

Hosei University Repository

したものであるが、ズィーファースの述べるように、235行から851行まで文体上の変化があり、他の部分（*Genesis A*）とは異なる。その部分（*Genesis B*）について、ズィーファースは、大陸のサクソン語（古期サクソン語）によって書かれた原詩があって、それをブリテン島の古期英語ウェスト・サクソン方言に翻訳したものであると推測したのであった。後に、古期サクソン語の原詩が発見され、ズィーファースの推測が正しかったことが、立証されたのである(32)。それは、やはり青年文法学派の一人としてライプチヒで学んでいたスイスのソシュールが、歴史比較言語学における印欧祖語の喉音についての仮説を発表し、後にヒッタイト語の発見でその言語学上の成果が実証されたのと同じような、大変重要な英語英文学上の出来事であった。古期サクソン語によって表わされた原詩の存在は、フランク王国によって領邦国家とされた大陸のサクソンが、いかにキリスト教の信仰の浸透していた地域であったかを、如実に物語っているが、それと同時に、ウェスト・サクソン王国と、フランク王国との間の友好的な関係のもとで、フランク王国からウェスト・サクソン王国に、キリスト教文化の流入があったことも示唆している。それは、直接的には、シャルルマーニュのザクセン戦争の結果もたらされたものではあるが、その淵源を遡れば、フランク王国において連綿と受け継がれてきた、アングロ・サクソン修道士の活動があり、究極的には、ローマン・カトリック教会のグレゴリウスⅠ世の、ブリテン島の布教事業に負うものであったと言えよう。

アンリ・ピレンヌは、ブリテン島に渡ったアングロ・サクソンについて、そのローマ文明によって影響を与えられていない点を強調し、彼らによるヨーロッパにおける新しい北方文明の出現を特筆している(33)。もっとも、アングロ・サクソンのブリテン島における諸国家の独自性の存在は、その故地と移住の軌跡が、ローマ帝国とほとんど接触を持たないものであったからであり、偶然的な要素によるものであったと言えるであろうけれども。一方、ピレンヌが大陸のゲルマン人諸国家について述べている部分は、裏返せばそのままアングロ・サクソンの独自な存在の説明となっている。大陸のゲルマン人諸国家は、その国家の地理的位置から、まずローマ帝国に影響を与えられ、またその一方でローマ・カトリック教会によるキリスト教への改宗を行っていた。アングロ・サクソンは、ローマ帝国の版図の北方に居住し、直接ローマ帝国とロー

Hosei University Repository

マ・カトリック教会の影響を与えられることなくブリテン島に渡り、ある程度ではあったが、もともとの北方の精神世界を存続させ続けた。ブリテン島の状況は、400年間ローマ帝国の支配にあったとしても、アングロ・サクソンの移住の時点で、ローマ・カトリック教会の支配は断絶していたからである。

5.

以上、イングランドにおいて最初の統一王国となったウェスト・サクソン王国をになったゲルマン人のサクソンと、その大陸の故地にとどまったサクソン（ザクセン）について、その成立を中心に考えてきた。タキトゥスとプトレマイオスに見られるゲルマン人諸部族を比較対照することにより、サクソンが、タキトゥスとプトレマイオスの時代の間に成立したことを論述の出発点と考え、その成立の主体となったゲルマン人について、様々な論者の説を吟味した。問題点は、最初のサクソンの成立の主体となった部族と、その後の北ドイツの広大な地域のサクソンの形成に直接的および間接的に関与した部族についてであったが、まず、最初のサクソン成立における主体となった部族を、タキトゥスのレウディーグニーであると考えた。さらに、その後のタキトゥス、プトレマイオスにおけるカウキーの広大な地域におけるサクソンの形成、発展について、カウキーとレウディーグニーの関係を中心に、論者の諸説、とりわけ、レウディーグニーによるカウキー併合説を吟味した。そしてそこにランゴバルトの間接的な関与の可能性を見出し、トゥールのグレゴリウスに文献的傍証を求めた。一方、ブリテン島移住以後のサクソンと大陸のザクセンの関係について、古期英語のウェスト・サクソン語による*Genesis*に、古期サクソン語の原詩の翻訳部分が見出されたことを通して、大陸のザクセンによるブリテン島のウェスト・サクソン王国への文化的影響および密接な相互の関係を確認した。そして、アングロ・サクソン修道士の大陸における布教活動、さらにはローマン・カトリック教会のグレゴリウスⅠ世によるブリテン島のアングロ・サクソン諸王国の布教に、その淵源があることに触れた。サクソンは、イギリス、ドイツ、そしてオランダの国民を構成することになった幾つかの有力なゲルマン人諸部族の一つであった。本稿は、そのサクソンの部族成立上の問題の、一つの部分

Hosei University Repository

的な解明の試みであったが、検討すべき他の新たな重要な文献に基づき、さらにその問題について追求したいと思う。

[注]

(1) *Anglo－Saxon Chronicle. Two of the Saxon Chronicles Parellel,* ed. J. Earle and C. Plummer, 2 vols, Oxford University Press, 1892, 1899 ; repr. 1972. 邦訳：大沢一雄編訳、「アングロ・サクソン年代記研究」、ニューカレントインターナショナル、1991年。

(2) Beda, *Venerabilis Baedae Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum. Venerable Baedae Opera Historica,* ed. Plummer, C., 2vols., Oxford, 1896. *Baedae Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum,* ed. and trans. J. E. King, Loeb. 2vols., London and Cambridge, Massachusetts, 1930. O. E. translation：*The Old English Version of Bede's Ecclesiastical History of the English People,* ed. Thomas Miller, *EETS*, nos. 95－96, 110－11, 2 vols., London, 1890－98. Mod. E. translation,：*The Venerable Bede's Ecclesiastical History of England,* trans. J. A. Giles, London, 1859. 邦訳：長友栄三郎訳、「イギリス教会史」、創文社、1971年。第1巻、第15章。

(3) *ibid.*, iii.

(4) *ibid.*, I－5.

(5) Cf. Chadwick, H. M., *The Origin of the English Nation,* Cambridge University Press, 1907, p. 92 ; Collingwood, R. G. and Myres, J. N. L., *Roman Britain and the English Settlements,* 2nd ed., Oxford University Press, 1937, p. 278.

(6) Ptolemaius：Klaudios Ptolemaios, *Claudii Ptolemaei Geographia,* ed. Karl Müller and C. T Fischer, 2 parts., Paris, 1883－1901. *Geographia,* ed. C. F. A. Nobbe, Leipzig, 1843/1845. 邦訳：織田武雄監修、中務哲郎訳、「プトレマイオス地理学」、東海大学出版会、1986年。

(7) もっとも、そのプトレマイオスのサクソンについての記述については、プトレマイオス以前の、その文献自体が消失しているマリウスの記述が典拠になっているという指摘もあり、その信憑性についても賛否両論があるが、ここでは、2世紀の半ばの事実として考えることにする。Cf. Chadwick, H. M., *op. cit.*, p. 193 ; Collingwood, R. G. and Myres, J. N. L., *op. cit.*, p.

Hosei University Repository

338；Schwarz, E., *Germanische Stammeskunde*, Carl Winter・Universitätsverlag, Heidelberg, 1956. p. 3, p. 118.

(8) Tacitus (Publius Cornelius Tacitus), *Germania. Cornelii Taciti de origine et situ Germanorum*, ed. J. G. C. Anderson, Clarendon Press, Oxford, 1938. 邦訳：タキトゥス著、泉井久之助訳、(改訳)『ゲルマーニア』、岩波書店、1970年。『ゲルマーニア』、40。

(9) Ptolemaius, *op. cit.*, X I, 6－11. ここでは便宜のために、プトレマイオスで言及されているゲルマン人部族の名称は、ラテン名の綴りに統一した。Cf. Chadwick, H. M., *op. cit.*, pp. 193－196.

(10) ジュートの故地および、そのタキトゥスのエウドセースとの関係は、拙稿「ジュートの故地とその移動の軌跡について――中世初期アングロ・サクソン諸王国の民族的背景（2）」、『法政大学キャリアデザイン学部紀要』、第2号、2005年、を参照。

(11) Caesar (Gaius Iulius Caesar), *Commentarii de bello Gallico*, ed. G. Dorminger, 2. Auflage, München, 1966. 邦訳：カエサル著、近山金次訳、『ガリア戦記』、岩波書店、1942年。

(12) Schwarz, E., *op. cit.*, p. 119.

(13) *ibid.*, p. 117.

(14) *ibid.*, p. 120.

(15) Hodgkin, R. H., *A History of the Anglo－Saxons*, 2vols., 3rd ed., Oxford University Press, 1952, Vol. I, pp. 4－9.

(16) *ibid.*, pp. 9－10.

(17) *ibid.*, p. 157.

(18) Chadwick, H. M., *op. cit.*, pp. 205－206.

(19) Collingwood, R. G. and Myres, J. N. L., *op. cit.*, pp. 338－339.

(20) Leube, A., *Die Germanen*, (hrsg. von Herrmann, J.), Band II, 2 durchgesehene Auflage, Akademie－Verlag, Berlin, 1986. pp. 447－448.一方、ロイベと同じ旧東ドイツの研究グループに属するザイアーは、後の広大な地域に居住するサクソンになった部族について、レウディーグニーの可能性を指摘している。Cf. Seiyer, R., Herrmann, J. (hrsg.), *Die Germanen*, Band I, 5 durchgesehene Auflage, 1988, pp. 52－53.

(21) Leube, A., *op. cit.*, p. 448.

Hosei University Repository

(22) Gregorius de Tours, *Gregori Episcopi Turonensis historiarum libri* X, in *MGH, SS rerum Merov.*, Tom. 1, ed. Wilhelm Arndt, Hannover, 1885. English translation : *History of the Franks*, by O. M. Dalton, Oxford, 1927. Die lateinisch－deutsch Ausgabe von R. Buchner, 1959. 邦訳：『トゥールのグレゴリウス　歴史十巻（フランク史）Ⅰ』、兼岩正夫、臺幸夫訳註、東海大学出版会、1975年。

(23) Widukind von Corvey, Drei *Bücher sächsischer Geschichte* (*Widukindi monachi Corbeiensis, Rerum gestarum Saxonicarum*, libri Ⅲ), herausgegeben von P. Hirsch und H. E. Lohmann in *MGH, SS rer. Germ. in usum scholarum*, 5 Aufl. Hannover, 1935, in "Geschichtsschreiber der deutschen Vorzeit", 2 Gesamtausgabe, Bd. 33, 1931 ; neu bearb. von A. Bauer und R. Rau, Darmstadt, 1977.

(24) Paulus Diaconus, *Historia Langobardorum*, ed. T. Bethmann and G. Waitz, in *MGH, SS rer. Lang.*, 1878. Cf. Janut, J., *Geschichte der Langobarden*, Verlag W. Kohlhammer GmbH, Stuttgart, 1982.

(25) タキトゥス、『ゲルマーニア』、40。

(26) プトレマイオス、『地理誌』、ⅩⅠ, 6－11.

(27) トゥールのグレゴリウス、『フランク史』、Ⅳ42。

(28) 同書、Ⅱ30－31。

(29) *Two of the Saxon Chronicles Parellel*, ed. J. Earle and C. Plummer, vol.1, Oxford University Press, 1892 ; repr. 1952, p. 21 (Laud MS.)

(30) Pirenne, H., *Histoire de l'Europe des Invasions au X Vle siècle*, Paris et Bruxelle, 1936. 邦訳：アンリ・ピレンヌ著、佐々木克巳訳、『ヨーロッパの歴史』、創文社、1991年、21－22頁。Cf. Janut, J., *op. cit.*, p. 135.

(31) *Genesis* in *The Junius Manuscript*, ed. G. Ph. Krapp and E. van K. Dobbie, Columbia University Press, New York, 1936, pp.1-87.

(32) *ibid.*, pp. xxv-xxvii.

(33) Pirenne, H., *Mahomet et Charlemagne*, Paris et Bruxelle, 1937. 邦訳：アンリ・ピレンヌ著、増田四郎監修、中村宏、佐々木克巳訳、『ヨーロッパ世界の誕生』、創文社、1960年、p. 197。

Hosei University Repository

Saxons and Sachsen : The National Background of the Anglo-Saxon Kingdoms in the Early Middle Ages (3)

Michio IWAYA

The Saxons are among the Germanic tribes who moved from the European continent to the island of Britain in the age of the Germanic migration. After their movement to Britain, the Saxons, together with the Angles and Jutes, established the so-called Anglo-Saxon Heptarchy. Alfred the Great, who finally united all the other English nations, was the king of a West-Saxon kingdom created by the Saxons. In contrast with the Angles and Jutes, however, the Saxons did not migrate from their homeland totally. The Sachsen, their German kindred, stayed in their continental homeland and they subsequently played an important role in German history.

This paper searches for the original entity of the Saxons and for its relation to the continental Sachsen. The formation of the Saxons is not clearly understood and there are several views on the matter. Two Germanic tribes, the Chauci and Reudigni, seem to have contributed much to the tribal formation of the Saxons. But it is still an open issue which tribe or tribes formed the Saxons. It is also unclear how the Saxons came to occupy the vast dominion of the Chauci. Those matters are to be sought entirely through the investigation into the references made by Roman writers and modern scholars. The historical relationship between Saxons and Sachsen is also pursued in order to illuminate the mutual influences in religion and culture in the early middle ages.